内村鑑三先生

写真帳

Ⅲ

1924~1932

東京市淀橋 柏木四丁目九百十九番地

内村家家族

《祐之美代子結婚(1924年 大正十三年十一月)後》

美代子 (22)

内村鑑三 (64)

祐之 (28)

静子 (51)

1926年（昭和元年）三月八日

孫女（正子）の寫眞を撮る爲に母と祖母と自分と三人附添にて市中に行いた。鍛冶橋外森川寫眞館主人の常に變らざる熱誠を罩めたる撮影を受けて愉快であつた。（先生の日記より）

母　長孫正子　祖父（66才）　祖母

同日同所に於て

孫女を抱く内村先生

（森川氏苦心の作であった後日述懐す）

1927年(昭和二年)六月廿一日(火)

「家族の者を伴れて杉並村に齋藤宗二郎君の田園的ホームを訪うた樂しき友誼の交換であつた。」(先生の日記より轉載す)

此の日先生は弊宅の正門を入るや否や早速独り苺畑を一周して其中から大形福羽、ドクトルモーレル、白苺等を指適して賞せられた。それより家人の供せし苺を賞味しながら歓談一時間に及んだ。

(寫真は(斎藤)茂夫の撮影せるもの)

1の27年(昭和二年)七月

三年間の獨逸ミンヘンに於ける精神病学の研究を了えて首尾能く歸朝せる祐之の不在中に安産せし健全なる長女正子の天眞なる顔を始めて見たる喜びと、父の留守中に生れし孫女を二年餘り極度に愛育し來り些の支障もなく無難に彼女の父の手に讓り渡されし祖父先生の慰安滿足とは該寫眞全面に漲るを認めて快感を覚える。

祐之札幌赴任前
岡田八郎 17
父祐之 31
母美代子 25
祖父内村先生 67
長女正子 2
岡田花枝 20
祖母静子夫人 64

1928年(昭和三年)七月廿五日(水)

先生は第六回札幌伝道(第十二回目の札幌行)として静子と共に上野を發(三陸地方伝道に赴く齋藤宗次郎氏同乗)車し、途上函館にて教友数名の歓迎を受け根山寺海岸に半日を費し二十七日午前八時札幌に着き多数教友の歓迎を受けた。孫女正子の笑顔に旅の疲を忘れた直ちに祐之の新居に安着した。寫真は其後撮りしもの。(ほ乳の一枚)

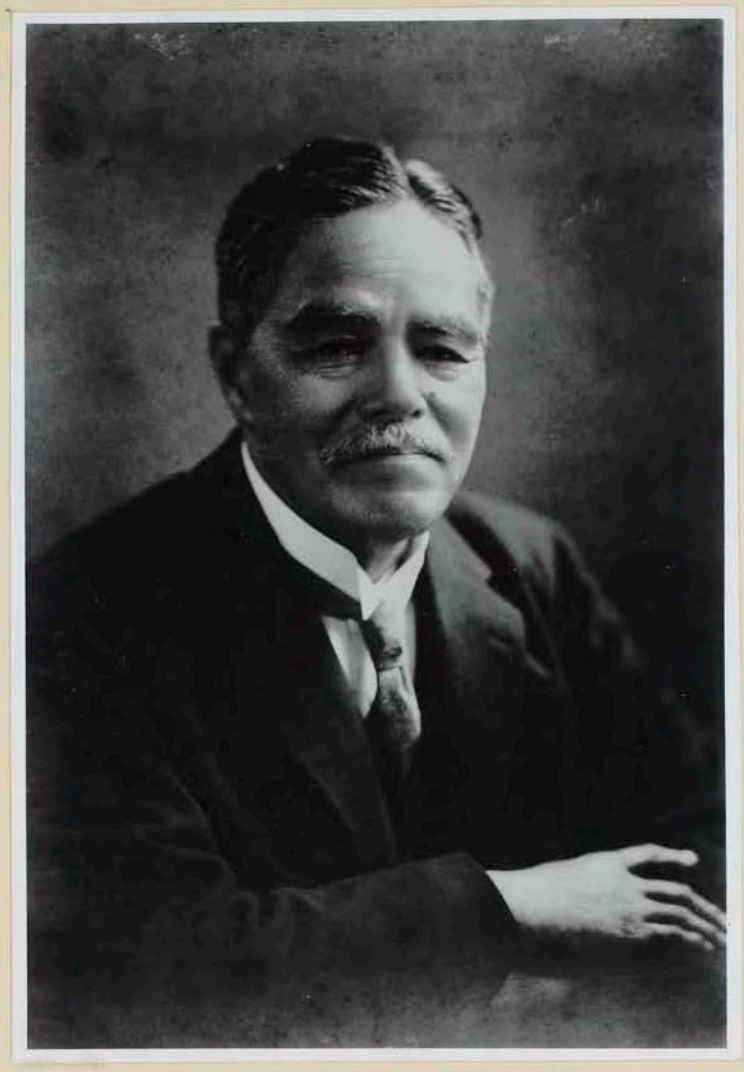
(今回は九月十五日まで滞留福音伝道のために働きる)。

1928年（昭和三年）三月廿一日(日)

「午前十時より大阪中之島公會堂の三階に京阪神『聖書之研究』讀者會が開かれた。來會者百人餘り、遠くは淡路、美作より來りし者もあった。塚本先ず「基督教道徳」に就いて講し、次に自分は「聖書の中心」に就いて話した。來會者は全注意を以て聽いて呉れた。十二時一先ず閉會、寫眞を撮り、晝食を共にし、直ちに感話祈禱會に移り語る者祈る者相次いで間斷なく、四時充實せる會合を終った。

閉會後敬友二人に案内され自動車で市中を見物した。ホテルに歸り友人四人と夕食を共にし、八時四十分發の夜行にて帰途に就いた。疲れし身は復台車に大なる安息を得た。」

（先生の日記より）



1928年(昭和三年)五月九日

森川寫眞館にて撮影(68才)

1928年(昭和三年)六月二日

犬嶋正健
内村鑑三 六六歳
伊藤一隆

1928年(昭和三年)六月二日
信仰五十年記念日に際し、同信
の友宮部金吾に次の祝電を送る
(平安なれ五十年間君と共に信仰
の道を歩みしことを神に感謝す)
後、青山墓地に至り五人集合し、ハリス
墓に詣ずる前暫時空地に休憩す。

新渡戸稲造
大鳥正健
内村鑑三
伊藤一隆
廣井勇

1の28年(昭和三年)六月二日

午前十一時、東京在住の同時の受洗者、新渡戸稲造、廣井勇と自分と三人、之に加うるに我等の先分なる伊藤一隆、大島正健の両君を加え総て五人両を囲して青山墓地に會し(次頁につづく)

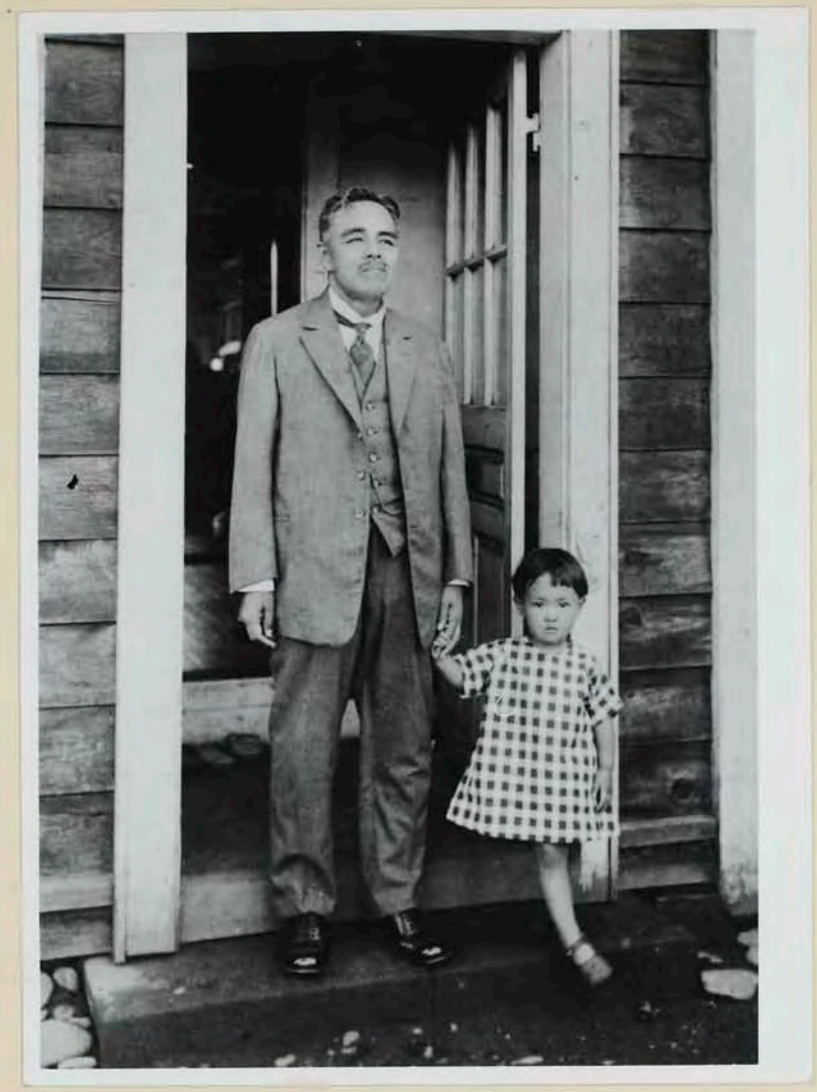
伊藤一隆
大島正健
新渡戸稲造
廣井勇
内村鑑三

(つゞき) 故M・C・ハリス氏の墓前に讀り、花環を供し、自分は詩篇第九十、九十一篇を英語にて朗讀し、續いて伊藤君が熱心溢るゝの祈禱を捧げた、「願くは我等今、此所に會するが如くに、茲の彼方に於て、一人も漏れなく會することを得しめ給え」と君の祈りしの時に、我等一同强制せるアーメンを以て應ぜざるを得なかった。實に永久忘るゝ能わざる聖き會合であつた。

(先生の日記より)

内村鑑三先生の晩年の寫眞

（寫眞の撮日、所不明）



1928年(昭和三年)夏
札幌に於ける内村祐之醫學士の新
居の玄関に長孫女正子の手を取つて立
たる、内村先生(六十八歳)

北門立志十九秋
挺身欲救國與民
中央奮闘半百歳
古稀從兒歸故山

初春

鑑三

1928年(昭和三年)八月七日

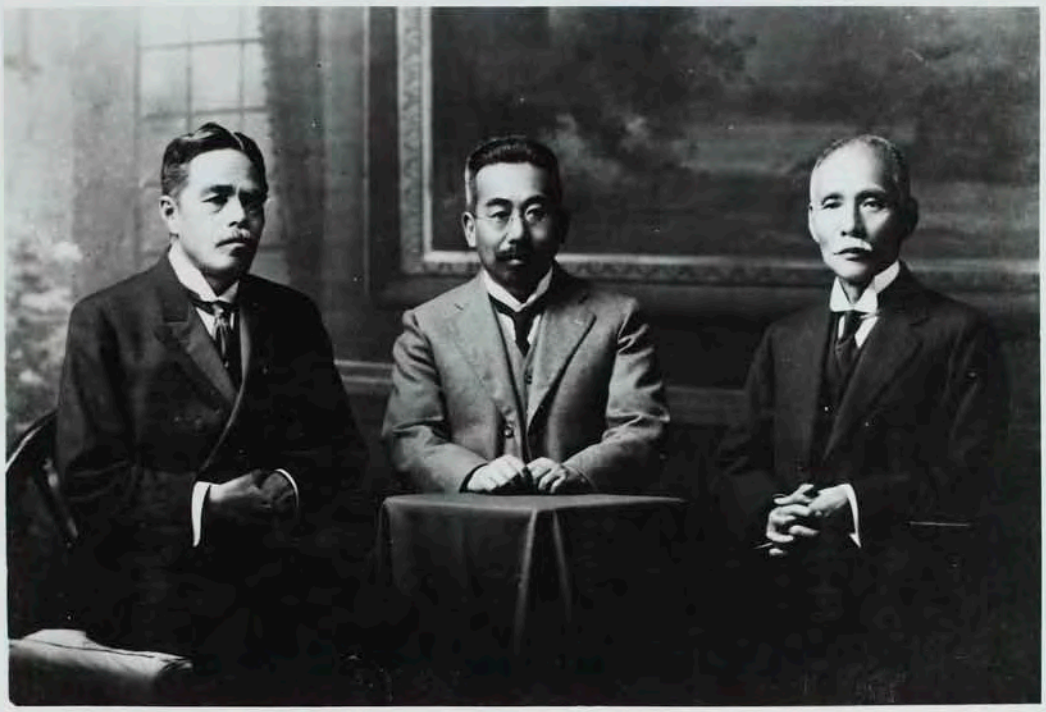
赤ん坊の命名式を行つた。北海道の名木カツラに因み 桂子(けい)と命名した。詩篇第百二十七篇を朗讀し、彼女の爲に祝福を祈つた。後に家族一同五人に親戚の者二人を合せて豊平館に感謝の晩餐を共にした。館は今より五十年前、自分が札幌農学校在学中に成つたものである。其古い建築物に於て我が孫の出生祝賀の筵を催すことが出來たのは不思議の因縁である。「エホバ家を建て給うにあらずば建つる者の勤勞は空し」視よ子等はエホバの与え給う嗣業にして、胎の實はその報いの賞なり」である。自分の生涯の末期がこんなに成ろうとは夢にも思わなかつた。

(先生の日記より)

晩年の著者（札幌にて）

1928年（昭和三年）八月頃

次孫女桂子さんを抱いて大自然
界（庭園）の中を散歩とうろう内村先生(68)。



1928年（昭和三年）九月

南鷹次郎　宮部金吾　内村鑑三

（於札幌）

1928年（昭和三年）九月十六日

「九月十五日(土)夜九時四十分多くの友人に送られて札幌を発ちた。十六日(日)、火山灰の南岸にて夜が明けた。駒ヶ嶽の麓より眺めたる灰の鏡面は美しかつた。朝七時半函館に着き、湯の川時代の家の客となつた。午後二時より商工会議所の議事堂に於て講演会を開いた。五十銭の聴料を払いて来り聴く者が百三十人あつた。自分は「繁栄の基礎」並に「宗教の利用に就いて」と題し一度に二回の講演を為した。函館に於て未だ嘗つて斯んな熱心の好い演説を為したことはない。開会後、今は函館市参議長たる舊開拓使時代の同僚松下熊雄君に自動車にて案内され、市内を見物した。勝察かつより帰来りし漁業汽船の活躍する状況を示され、我が心が躍つた。北海道産業の発達に関する自分の青年時代の理想の実現を見たからである。夜に入り舊い同窓の一人与尾熊三君と君の湯の川の家に訪い舊古を語り祈禱を共にして帰つた。充実せる一日であつた。」（先生の日記より抜載）

信州沓掛 星野山荘 玄関前に立てる内村先生夫妻

1929年(昭和四年)九月十五日(日)

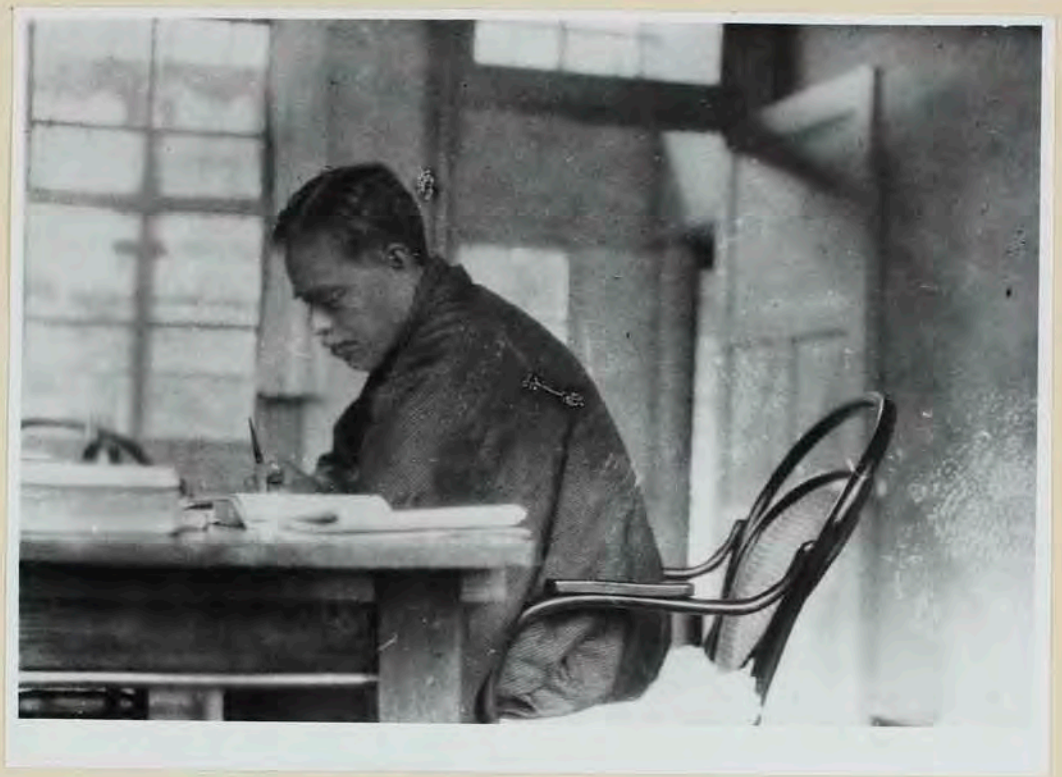
朝早く山形県小國傳道組の歸途訪問があり、朝食を終えて家族を合せて総て五人、共に聖日を守つた。田舎傳道の必要と樂しさを語り合うた。

愈々明日山荘引上げと決した、大體に於て善き休養であつた。(内村先生の日記より)

感謝して、上野行列車に乘り午後一時先生に別れを告げて歸途につき、碓氷峠を祈の間に過ぎた。(齋藤三郎野人記)

1929年（昭和四年）自七月廿五日 至九月十九日

星野温泉山荘内書齋に於ける内村先生



星野温泉は、先生が大正十一年八月以來夏期幾度か休養せられし所であるが、今回は最後の事となった。當時私は柏木なる内村邸の留守番を仰せ付って日夜緊張してその重任を守って居った。

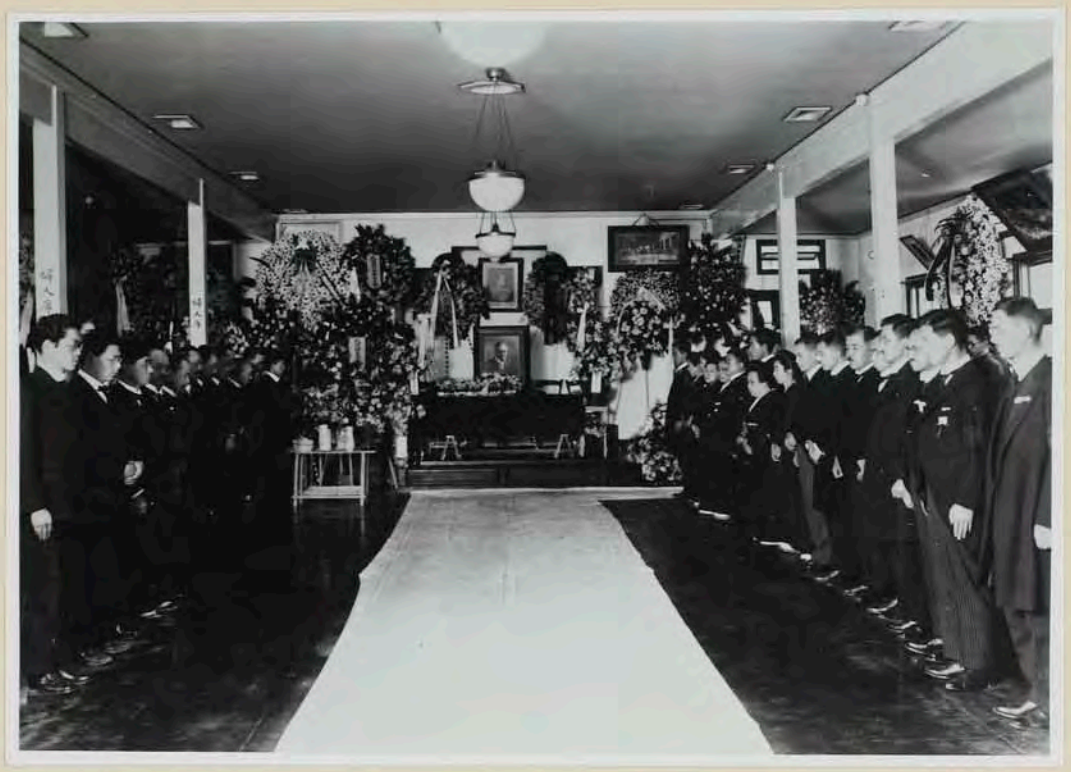
適〻先生の目下御苦心中の一つの問題が解決の曙光現われ來ったので、一刻も早く先生に報ぜんと、九月六日獨り星野山荘に先生御夫妻を訪ねて具さにその要旨を傳えた。先生の喜悦滿足は一入通りでなかった。早速私は廊下に一つながる別館（明治の初年グラント將軍來朝の砌、その宿泊所として仙台に新築せる洋館を譲り受けしもの）に導かれ大方卓に先生と對坐した。先生は世界地図を繙き ロマ法王のバチカンの現狀を歎かれ、又柏木の集會の實狀に心を向けられた。次に窓外に視線を轉じ、緑の森〻秋草の美を賞し、野鳥の歌と小川の水音に耳を傾けて自然界の壯嚴と調和とに私の鋭敏なる注意を促された。時將に正午。勝子夫人の聲に應じパンの晝食を共にするを許された。

時の迫るに及んで私は辭し去った。時に沓掛駅頭まで徒歩態々見送られし先生の懇ろなる好意を感謝しつゝ上野行列車に乘り午後一時先生に別れを告げて歸途につき、碓氷峠を越ゆる間に過ぎた。

（齋藤二郎筆記）

十字架の福音の使徒内村鑑三は神の聖召に應じ、
一千九百三十年（昭和五年）三月廿八日午前八時五十一分昇天。
其夜九時より有志者の涙ながらの祈禱會

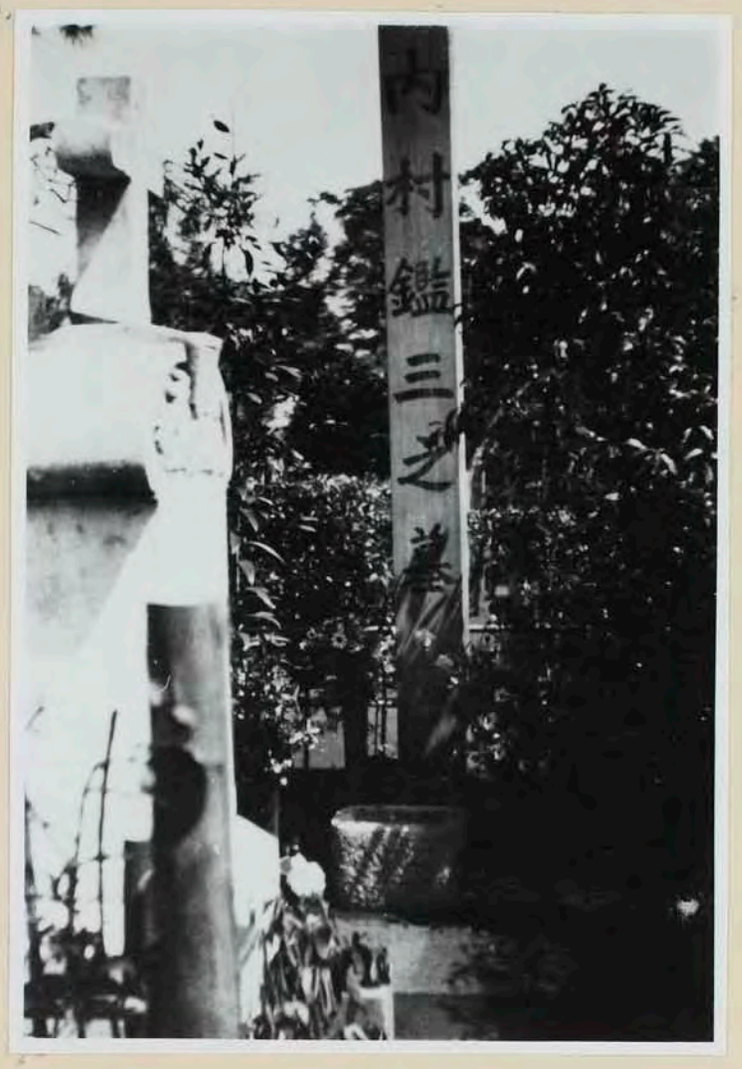
翌二十九日石河光哉氏一名の助手によってデスマスク成るや午
後二時出門帝國大学醫学部にて解剖に附し四時歸る。
午後五時納棺　夜八時棺前に祈禱會を開く。



三月三十日 葬儀の後 一般會葬者
の告別式に入らんとする時の式場

左右に並列せるは遺族親戚友人會葬が
會葬者に謝意を表せんとするところ。

一千九百三十年三月三十日内村鑑三先生
の嚴肅なる葬儀施行中の状況。
午後一般會葬者の告別
午後三時半出棺　午後七時半火葬濟（堀の内）



一千九百三十年（昭和五年）四月六日吉岡愛氏
於て内村聖書研究會御導散（石原兵永氏司会）
同日午后三時与瀬司谷墓地に埋葬式を行う。

七里骨式の光景

埋骨式後内村祐之氏の挨拶。

四月六日埋骨式後墓前に於ける
臨場者一同の記念撮影。

一千九百三十二年（昭和七年）三月十六日
市内雑司ヶ谷より内村家の墓を多磨霊園に移す。

To be Inscribed upon
my Tomb.

I for Japan;
Japan for the World;
The World for Christ;
And All for God.

内村鑑三先生が生前自ら書き遺し置かれたる墓碑銘

内村鑑三先生二周年記念日一九三二年(昭和七年)
三月二十八日に墓前に於ける集會(遠藤猪三郎司会)の光景。

内村鑑三先生（47才）
〃　祐之（11才）

1907（明治40）年8月上旬
海保宅にて撮影

一九一二年
大正元年十月十八日　札幌本巾にて撮影

斎藤新沼郎
市川春松　浅野横三郎　長谷川松吉妻
森牛慶三　山岸生五　小田代札ん
長谷川松七　海保竹松
松井延太郎　内村鑑三先生
中田信蔵
青木義雄
浅見仙作
佐藤喜平治　斎藤多祈子
木村　允
斎藤宗次郎

一九一二年
大正元年十月十八日　札幌にて撮影

齋藤新次郎
浅野猶三郎　長谷川松七妻
山岸壬五　小田代北人
海保竹松　内村盤三先生
中田信蔵　青木義雄
佐藤喜平治　斉藤多所
木村允　齋藤宗次郎
市川春松
森本慶三
長谷川松七
松井延太郎
浅見仙作

一九〇七年
明治四十年八月上旬　海保宅にて撮影

内村盤三先生　四七才
祐　之　一一才

昭和五年三月三十日
東京柏木　内村先生
葬儀の節　内庭に於て写す

蒲地　信
森本慶三
海保竹松
田中龍夫

藤沢音吉
浅野猶三郎
畔上賢造
青藤宗次郎
井口喜源治
小山　英助

（11頁遡ってデスマスクの次に入るべきもの）